

# 土木屋の読書と旅(8)

令和元年7月

いささか感傷的すぎるかもしれないが、「流星」を題名に含む2冊の本の話をしたい。

■昭和50年頃読んだ本 「流星」 ～井上靖詩集「北国」より :新潮社(昭和33年初版)  
『 流星

高等学校の学生ころ、日本海の砂丘の上で、ひとりマントに身を包み、仰向けに横たわって、星の流れるのを見たことがある。十一月の凍った星座から、一條の青光をひらめかし忽焉とかき消えたその星の孤独な所行ほど、強く私の青春の魂をゆり動かしたものはなかった。私はいつまでも砂丘の上に横たわっていた。自分こそ、やがて落ちてくるその星を己が額に受け止める地上におけるただ一人の人間であることを、私はいささかも疑わなかった。

それから今日までに十数年の歳月がたった。今宵、この国の多恨なる青春の亡骸一鉄屑と瓦礫の荒涼たる都会の風景の上に、長く尾を引いて疾走する一箇の星を見た。眼を閉じ煉瓦を枕にしている私の額には、もはや何ものも落ちてはこようとは思われなかった。その一瞬の小さい祭典の無縁さ。戦乱荒亡の中に喪失した己が青春に似て、その星の行方は知るべくもない。ただ、いつまでも私の瞼から消えないものは、ひとり恒星群から脱落し、天体を落下する星というものの終焉の驚くべき清潔さだけであった。

\*原文は旧漢字旧仮名遣い』

元来私は教科書以外で詩を読む習慣などなかったが、観念を凝縮した短編小説のような『流星』に感化され、日本海の砂丘の上でひとり仰向けに横たわってみたいと思った。ただ、この北国の砂丘がどこにあるのかはすぐには分からなかった。作者・井上靖は第四高等学校(現:金沢大学)出身であるから金沢周りだとは思いついたが。

私の大学時代は全国的に荒れ狂った学生運動が終焉を迎え徐々に学園内が落ち着きを取り戻そうとする時であった。当時よく学生たちが読んでいた小説には「赤頭巾ちゃん気を付けて(庄司薫:芥川賞)」「されどわれらが日々(柴田翔:芥川賞)」「内灘夫人(五木寛之)」があった。



いずれも学生運動を背景に青春の彷徨や葛藤をモチーフにした青春文学である。「内灘夫人」は人々がいつか通り過ぎる青春の門を、昭和27,28年の内灘闘争の中で迎えた主人公「霧子(有閑マダム)」と10年遅れの学生運動の中で通過しつつある「克巳(学生)」とが新宿デモでのカンパ活動の中で出会い、霧子が思い出の地内灘で迎える青春への決別で終わる物語である。

当時、私は後期試験の終わる3月に貧乏一泊ひとり旅をしていた。「雷鳥」に乗って金沢に行ったが、40年以上前のことゆえ記憶に残っているのは3つのシーンだけである。ひとつは行きの電車で乗り合ったご婦人に車窓に見えた白いこぶしの花を教えてもらったこと、二つ目は市街地の東に位置する卯辰山から見た金沢の町並みであり、浅野川と犀川に挟まれ北陸特有の曇天の小雨に艶めかしく光る黒瓦の静謐な空間構成である。二つの川沿いに三つの廓(ひがし・主計町・にし茶屋町)があり、金沢の三文豪徳田秋声、泉鏡花、室生犀星(訓読みすれば“ほしくず”)の記念館もある、頑固な古い日本の伝統的な町である。五木寛之も金沢在住時に初期の作品群「さらばモスクワ愚連隊(小説現代新人賞)」「蒼ざめた馬を見よ(直木賞)」「青年は荒野をめざす」「青春の門(掲載開始)」などを執筆している。

3つ目は金沢駅からローカル線の終着駅内灘駅に行ったことである。駅からすぐに日本海は見えた記憶はないので既に市街化が進んでいたと思うが駅周りの風景は思い出せない。3月の曇天の中少しばかり歩くと内灘海岸に着いた。小雨交じりの風が強くて砂浜に横たわることはあきらめた。五木寛之のエッ

# 土木屋の読書と旅(8)

令和元年 7 月

セーには(金沢駅から日本海へ続く終点内灘駅について当時の国際運動を彷彿とさせる)『次の停車駅はシベリアです』という落書きの文句を思いだした』という文章が出てくる。

後日談だが、井上靖はなぜ金沢の第四高等学校へ行ったのだろうか。井上は四高の後、京都帝大文学部哲学科を卒業し毎日新聞社へ入っている(昭和 11 年)。哲学者・西田幾多郎は四高教授を経て京都帝大教授になり、昭和 20 年逝去している。井上の学歴は西田の教授在任中とは四五年ずれ重ならないが、西田の故郷は現在の石川県かほく市であり、内灘砂丘の北端、七尾線宇野気駅の近くに西田幾多郎記念哲学館(設計:安藤忠雄、H14 開館)がある。やはり『流星』の砂丘とは内灘砂丘であると思う。

\* \* \*

■平成 30 年に読んだ本 「流星ひとつ」 ~沢木耕太郎 :新潮文庫(平成 28 年、単行本 H25)  
ノンフィクション・ライターの先端を走る沢木耕太郎が“藤圭子”の引退を前にして試みたインタビューを基にした一篇である。あとがきによれば、『時代の歌姫がなぜ歌を捨てるのか。その問いと答えを、彼女の二十八年間の人生と交錯させながら、いっさい「地」の文を加えずインタビューだけで描き切る』とあり、彼が模索したひとつのノンフィクションの方法論を見事に結実させた成果であると思う。また、この作品がなぜ平成 25 年まで長い間刊行されなかったのか筆者の心情は痛いほどわかる。

沢木耕太郎が彼の代表作である『深夜特急』(26 歳の彼が、千五百ドルのトラベラーズ・チェックと四百ドルの現金をもって、ニューデリーからロンドンまでユーラシア大陸を乗り合いバスで行く、旅ルポの古典、バックパッカーのバイブル)でロンドンに到着したのち日本に帰るため、怪しげな格安切符を持って仏オルリー空港でなかば諦めつつ空席待ちをしているとき、偶然にも黄色いオーバーを着た『驚くほど若い、でも整った、人形のような少女(藤圭子)』に出会ったことがあるという彼の回想談から、インタビューは密度を上げ切れ味も増していく。

私の下手な読後感を書きたくないで、この本の書評ではないのであるが、私がこの本から受けた印象が一番近いと思う、藤圭子の引退会見を見ての識者のコメントを紹介することで代用したい。

『それは引退の記者会見でありまして、新聞に出てた写真なんかとは大違い、実に彼女は明晰に的確に、しかも毅然として話をしているのです。(中略) 私は久々に“潔い”という言葉思い出して、エライ、エライと藤圭子を応援したのでした。

(橋本治「週刊アサヒ芸能 1979 年 11 月 8 日号」) \*和田誠:イラスト「時の人」

時代に支持された歌手として、<六十年安保成立時代の西田佐知子、七十年安保通過後の藤圭子>というフレーズがある。

古谷 健

♪ アカシアの雨がやむとき (昭和 35 年)

アカシアの雨にうたれて  
このまま死んでしまいたい  
夜が明ける 日がのぼる  
朝の光のその中で  
冷たくなった私を見つけて  
あの人は  
涙を流してくれるでしょうか

♪ 圭子の夢は夜ひらく (昭和 45 年)

赤く咲くのは けしの花  
白く咲くのは 百合の花  
どう咲きやいのさ この私  
夢は夜ひらく  
前を見るよな 柄じゃない  
うしろ向くよな 柄じゃない  
よそ見してたら 泣きを見た



夢は夜ひらく